

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	子どもにとって泣くということ
Author(s)	武村, 昌於
Citation	児童の言語生態研究 , 13 : 8 - 17
Issue Date	1988-03-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045142
Right	
Relation	



子どもの泣き

児童の言語生態合同調査・研究報告

子どもにとりて
泣くとは

武村昌於

1 序

私は、小さいころから、ちょっとしたことでウジャウジャ泣いていました。泣くときは、いつも小さく泣いて泣いていました。気が弱いほうなので、よけい悲しくなってしまうました。または、泣きたくなくとも、なみだが次から次へとどんどん出てしまうのです。悲しくなくてもなみだが出て、最後にはとつても悲しいのです。

(4年女子の作文、傍線筆者)

一般的に、泣くということは、困っているから泣く、悲しいから泣く、というふうにだけ受け留めている。そして、「どうして泣いているの?」と言って、その困った或いは悲しい内容や動機を尋ねようとする。しかし、それは、この作文にあるように、「泣きたくなくても泣いてしまう」ことがあることを、どう説明するのであろうか。「それは、その子が涙もろいからだろう」と言うかもしれない。しかし、その涙もろさは、この子の言うように、単に気が弱い故のこととしてよいのかどうか、果たして疑問である。一般的に涙は、「弱さ」「弱者」の表象として見る。

けれども、大人であっても、感激に咽で泣くこともあるし、「かたじけなさに涙こぼるる」こともある。

誰でも「泣いて」育ってきたはずである。そして長い人生において涙の枯れる時は無い。たとえ涙は流さなくとも、「泣きたい」時はいくらでもある。子どもにあつても、その経緯は同じである。我々はそこに、子どもの心の在り様を見出すことを教育の根底としたい。何故なら、「泣き」は、子ども、人間の本来に根差していると考えらるからである。

冒頭の作文では、「なみだが出て、最後にはとつても悲しくなる」とある。「泣く」ということは、このように、

涙を流す、という生理現象が先にあって、それに伴って「悲しみ」という感情が意識されるということであるかもしれないのである。更に「いつも小さく泣いて泣いている」とあるように、常に「体感」を伴っている。泣く時にはいつも体が縮こまっているという感覚は、その子なりの泣きのポーズを取らせる要素となるものであり、また自分なりに感情を整理しようとする働きでもある、と我々は考える。

ところで、「泣き」は、何故このような感情整理を伴うのであろうか。我々はここに、子どもの感情生活の浄化、魂の浄化作用を見る。つまり、泣くことによって自分の感情が、本来有るべ

き処に落ち着くのではないか。そしてその落ち着き方が、その子なりの本然に根差した姿を如実に表しているのではないか、と考えるのである。

以上のようなことを仮説として、我々は子どもの作文を手がかりに検証していった結果を報告したい。

2 調査方法及び整理のしかた

4才女兒の実際の泣きの音声を聞かせた後、作文を書かせた。

その音声は、テレビのドキュメンタリー番組で、盲目の両親に育てられている女兒がわがままをした為に、両親から叱られ、外に出され、母親を追っている時の泣き叫んでいる声である。

両親はその子に反省を迫っているのであるが、その子は、なかなか「ごめんない」の言葉が出なくて、泣き続けているという場面である。

作文では、この音声の子が、どういう状況で泣いているかを書かせるのではなく、この泣き声は、自分の場合だったらどういった時に発した声であるかをその時の状況を交えて書く、というふうに指示した。

このように書かせた作文を分析するにあたって、泣きの精神作用が表れている文をカードに書き出す方法を採用した。そのカードの中から特徴的なもの

を拾い出し、それにタイトルを付け、そのタイトル名を分類整理したものが10頁11ページの図である。

4才兒の泣き声を聞かせて作文を書かせることは、初めから意図したことではないが、結果として、子どもたちの泣きの生感が如実に表れた作文となった。それは、4才兒という段階が、人間としての感情を意識し始める原点であるということが確認できた為であり、泣きの音声を聞きつけることによって、子どもたちが自分の過去の経験と刺戟剤として、自分の泣き或いは涙に関することを書かなければならないような仕組みに持っていけたからである。

余談であるが、ある4年生担任の先生から「書いたら、みんなサツパリしたようだ。みんな人間が素直になって、私との距離が縮まったように思う。」という報告があった。また6年生のある女子は、この作文が自分の手元に戻ってこないことを知ると、「こまるー、あれは私が表示されているのだから、恥ずかしい。絶対に返して。」と言ってきた。この二つの例からも分かるように子どもたちの本音が随所に表れていると見て取ることが出来る。子どもたちが本音を隠さずに書いたのは、やはり、自分の感情を手玉に取るというようなどころまで、まだ子どもたちが発達していない、と言ってもいいであろう。

調査実施校

2年生	前橋 中川小	四十五名
3年生	八王子 八王子第六小	三十八名
4年生	練馬 富士見台小	三十一名
	横浜 川上小	三十四名
	前橋 中川小	三十九名
5年生	東京 私立聖徳学園小	十六名
東京	私立聖徳学園小	二十七名
東京	私立玉川学園小	三十六名
6年生	東京 私立玉川学園小	七十六名

調査実施期間

昭和六十年六月～七月

3 調査結果

泣きに関する精神構造図及び作文例

以上のような調査方法によって、作文を分析整理した結果を、「泣きに関する精神構造図」としてまとめることができた。また各項目に対応した作文例によって、その内容が明らかになることと思う。

10頁11ページの「子どもの作文に見る『泣き』に関する精神構造図」参照

「泣き」に関する精神構造の作文例

形態

(1) 孤立

(1) 1 見捨てられ

(わかってもらえない)
(すねる)

○3年 泣いたとき、「どうせぼくなんかいなくてもいいんだ」と思います。

○6年 いっしょうけんめいしゃべろうとしても、他の人にはわかってもらえない。

○6年 その時は、なんで泣いていたのか、自分で分かりませんでした。ただ、お母さんが行ってしまい、さびしくて泣いていました。

(1) 2 孤立とかまわれたさ

○6年 この泣き声(テープ)は、自分の思い通りにならなかった時によく出る。特に自分が一人にされた時、みんなから見放されたときに多い。要するに自分をかまってくれない時に、このようになるのだ。

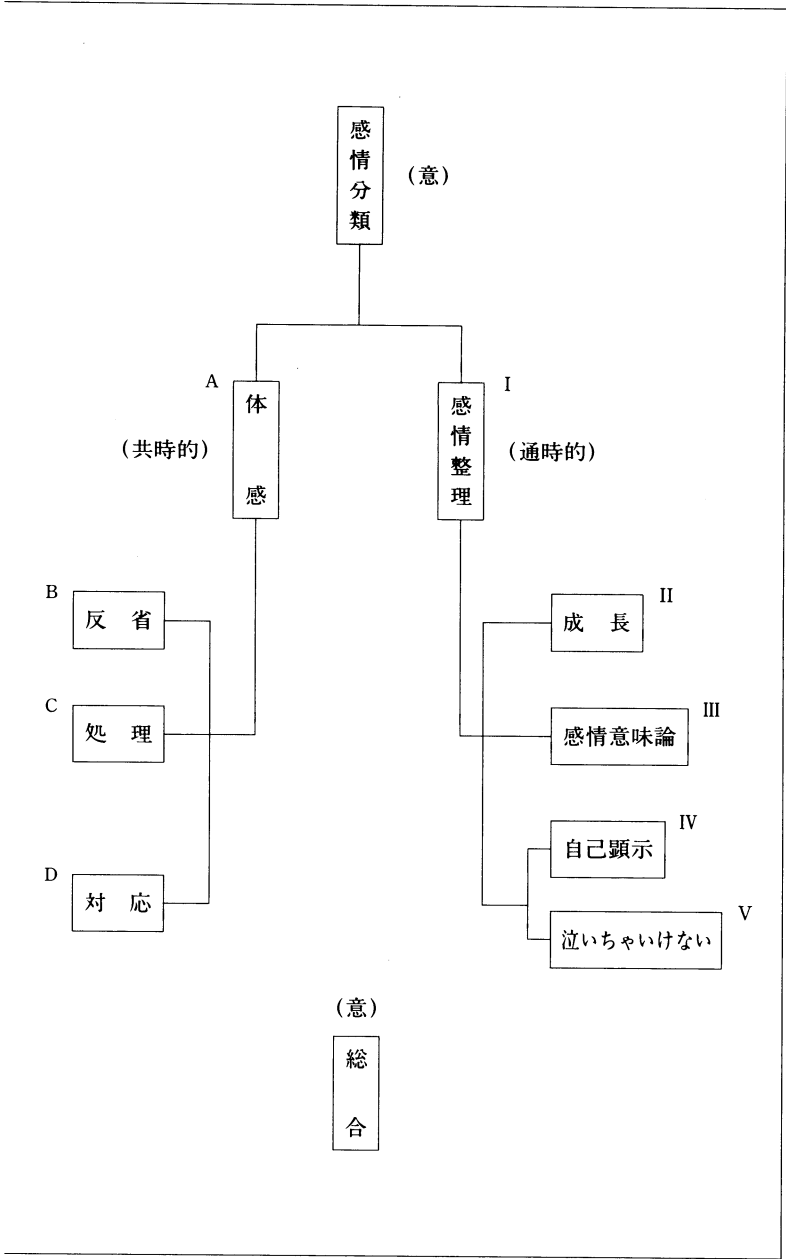
(2) 強情

(2) 1 わがままの押し通し

* (その小なるもの)

○2年 時々どっかにかくれてなくとも、ありました。

○3年 すききらいをいって、これいやだとか、そういうわがままをいった



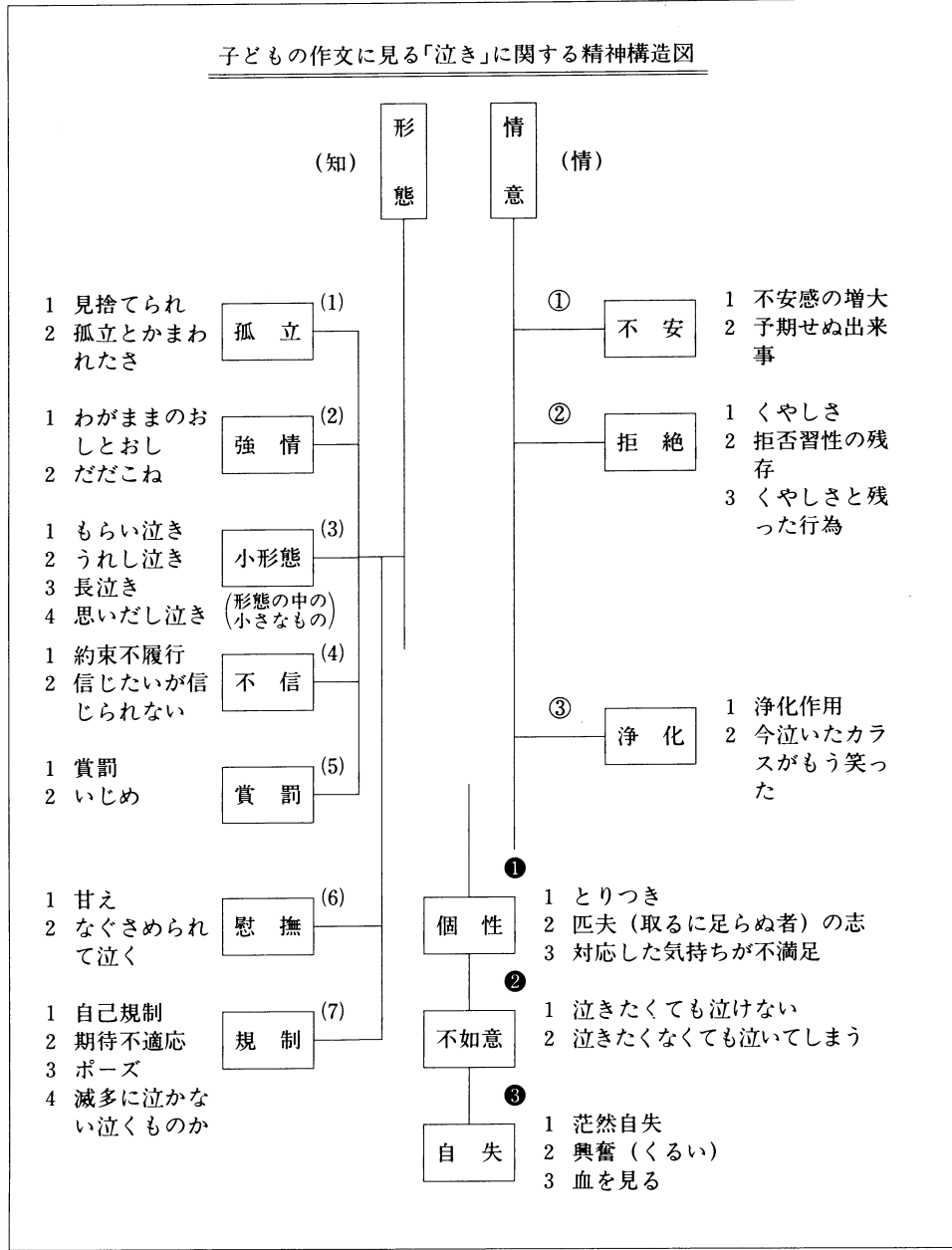
ときに、なきます。
 ○ 4年 くやしかった時は、自分の部屋に入って、こそこそとなきます。
 * (その大なるもの)
 ○ 5年 (テープの)あの泣き声はものをねだる泣き声。でもお母さんは、むしろ、行ってしまう。だからわめく。
 ○ 6年 小さいうちは、なければならなくなると思っているから、ないたのでしよう。
 (2) 1 2 だだこね

○ 4年 声が出なくなるほど「やだ」とても言うように泣きました。
 ○ 6年 泣いて泣いて泣きわめいた。
 (3) 小形態
 (3) 1 もらい泣き
 ○ 3年 (かわいそうな本)なみだがポツポツ落ちてきます。ふいてもふいても出てきます。その本を読みおわると、なみだが止まります。私はそのことがとてもふしぎに思います。

○ 3年 人がないしていると「どうしたのかな」しか思わないけど、きょうだいと自分もかなしくなる。
 ○ 4年 人とけんかして目になみだがじわつと出てきた。それで友達もほくも二人とも泣いてしまいました。
 (3) 1 2 うれし泣き
 ○ 5年 うれし涙が出ました。
 (3) 1 3 長泣き
 ○ 2年 なくのは、つかれました。
 ○ 3年 わたしは、小さいころよくな

いていたので、おばあちゃんによくしかられました。まだようちえんには、行っていませんでした。そういう時はいつもずつとなきやまないでいました。なきやみたくても、なきやめませんでした。
 (3) 1 4 思い出し泣き
 ○ 2年 思い出して、そつとないてしまします。
 ○ 5年 その時はそれほど悲しくはなかったが、うちへ帰ってみると、胸の奥にあった悲しみがどつとこみあげてきた。後から聞いた話だが、母が一生懸命になぐさめたのにもかわらず、5分も泣いていたそう。
 (4) 不信
 (4) 1 約束不履行
 ○ 6年 連れていってくれるといつたのに、連れていってもらえず、ただ、行きたくて十分ぐらい泣いていました。
 (4) 1 2 信じたいが信じられない
 ○ 6年 (泣いたというより、わめきちらした思い出)父がものすごくおこり、私をかっついて、すぐ裏にある川まで運んで、その川の上でぶらぶらふり回された。
 これは死ぬ、と思いい、必死で父にしがみついた。こわくてこわくて、その時は、だれか助けてくれないか、本気じゃないにしろ、父が本当に私を川に投げ込んだらどうしよう、そんな事を

子どもの作文に見る「泣き」に関する精神構造図



考えていました。
その後も、私はわめいて、ギャーギャー泣いていたようです。

(5) 賞罰

(5) 1 賞罰

○3年 小さい時、おしっこをもらした時、お母さんにしかられて、とつてもよくなきます。
○3年 ぼくはお父さんの言うことをきかない時、本気になぐられます。そしてはんべそをかきます。

○3年 おもてに出されたりして、えんえんとなっていた。
○5年 その時は、悪い事をして倉の中に入れられたという気持ちは全然無く、こわくて少しでも早く倉の中から出たい気持ちで、あたりかまわず泣き

わめいていたと思う。

今思えば、素直にあやまればよかったのに、こわさだけのために泣いていた僕でした。

(5) 1 2 いじめ

○3年 みんなにプールで水をかけられて泣く。

みんなに背中に乘られて泣く。

いたくて泣く。(顔をなぐられた)

○4年 ぼくが泣きおわると、ぼくをいじめた子がかくれたところから出てきて、「バーカじゃん」と言われたから、しかえして、エーンと言ったら、頭をぶつてきて、今度は少しキックしてぼくを泣かしました。

○4年 泣くと泣くほどいじめられました。

○4年 いじめられると、なんとなくかなしくなり、がまんしてもこらえきれない時があります。

(6) 慰撫

(6) 1 甘え

○2年 ないていると、友だちがやさしくなぐさめてくれていて、元気をとりもどしました。2年生になってから泣いてばかりいました。

○4年 ねこのようにならない。

(6) 2 慰められて泣く

○4年 母が「さっちゃん、いつも運んでくれるのに、ごめんね」と言ったのです。でも、あやまられたのに、私はなぜかわからないけど、泣いてしま

ったのです。

○4年 こらえたなみだはピタッとやむことがあります。そして、だれかになくさめられると心がキューンといったくなって、もつとなきたくなりませう。

(7) 規制

(7) 1 自己規制

○2年 こんどのときは、なかなかいようにしようと思いました。

○3年 泣いた時、その人をしかえしします。強い人ならにげます。弱い人ならにげません。弱い人は泣かせません。

○2年 泣くのをがまんしました。

(7) 2 期待不適応

○5年 もう私は5年生なんだから、泣かないようにしたいけど、なかなか出来ません。私は家でも泣かないようにがんばりたい。

○6年 責任(期待)をうらぎったので、お母さんにおこられ泣いた。

(7) 3 ポーズ

○3年 人間は一生に一回は、泣かないといけないのです。

○3年 わたしならつくえにすわり、なきませう。

○3年 わざとお母さんの前で、わざと大きな声をだしてないたりしました。

○3年 なくとき、すぐに自分のへやに行きかけの方でなっています。わたしがなきおわるまでごく時間がたち

ます。ひどくなると、ずつとへやの中にとじこもっています。

(7) 4 減多に泣かない、泣くものか
○3年 お母さんにたたかれたから、ぼくはないてはいました。なきそうになりませう。でも泣きませうでした。

○3年 2分ぐらいの時もあるけど、あまりなかつた。

情意

① 不安

①-1 不安感の増大

○2年 きもちでないときは、お母さんがいなくなつたらどうしよう、と思ひました。

○2年 こわくてこわくて、キヤキヤなきませう。

○3年 自分がなくときは、お母さんがお父さんにひどくおこられたときにしか、ながくないていない。

○4年 トイレに行くときも、ドアをしめるのが、とじこめられたような気がしてすぐ泣いてしまひました。

○6年 初めてあつた地震(というより初めて見た)。私は初めてだったので泣いた。

○6年 高い所に行くとき「死ぬかもしれない」というきょうふ感が心の奥から生まれてくるから(泣き声はげしい)。

○6年 コンクリートにほつたをすつてしまひ、大声で泣いてしまひませう。

た。痛くて痛くてしようがなかつたし又、私はこのまま一生痛い思いをしな

くてはいけないんじゃないのか、一生このきずは治らないんじゃないのか、という不安と一緒に泣いてしまひました。

①-2 予期せぬ出来事

○6年 (今、考えてみるとわらつてしまひませう)さくの所にいると、急に牛がたくさん寄つてきたので、おどろいて大きな声で泣いた。

② 拒絶

②-1 くやしき

○3年 いちばんくやしきと思つたのは、いじめられたり、弱虫だと言われた時。

○3年 やつぱりないたら、はずかしい時もありませうが、くやしきです。

○3年 「人にはつかしめなないでよ」と言つて泣いてしまひました。

○3年 まつしまくんとけんかするといつもまける。それでないてしまひませう。

○4年 くやしくてがまんしようとして、なみだがたまつてしまひませう。

○6年 しかられた時などは、思ひきり泣いて反省してない。早くお母さんがあやまつてほしい、僕は悪くない」というくやしき気持ちがある。

○6年 私は、大声で泣く時は、必ずくやしきがありました。ほんとにほんとに、くやしき時でした。

②-2 拒否習性の残存

○5年 泣くというのは、こうかいしている時の(行動)のような気がしまひませう。

○5年 私は、泣いた事はいつばいあります。けれど原因はみんな泣くほどでもないことで、後からこうかいするだけませう。

○6年 小さい時、「子供の家」に行くたびに泣きませう。その先生を見ると、まだ(こわい!)とも思わないうちにませう。そして、(あんな先生いなけりやいい)と思ひました。(もうその時は、そんなにこわいなんて感じてなかつたんでませう)。でもなぜか泣いてしまひませう。無意識のうちに。

泣いている時の気持ちは、ただ相手をいやがただで、なぜないたか、よくわかつていなかつたんでませう。

○6年 私は、なんでなみだが出るんだらう。くやしきだけなのに……はずかしいと思つた。

②-3 くやしきと残つた行為

○6年 私の頭の中に、姉の私に対する、どろぼう、という言葉がかけずりまわつてしまひました。私は泣きながらおしゃぶり昆布をしゃぶつてしまひました。

③ 浄化

③-1 浄化作用

○4年 泣くと自分のへやにもどり、十分ぐらいたつと、自分の気持ちが軽くなり、みんなの所へ行く。

○4年 泣いた時、声がかれたりする

まで泣くけど、はあはあ言っている。けれどなんかすつきりする。

○5年 涙なんて出したいくないけど、出してもいいような気がする。それは涙を流してみても、しばらくして頭の中がすうつとぬけていくようで、気分もよくなるし、せいせいするから。

涙を流すと、体が勝手に意識して動いているような感じになってしまふ。

○5年 悲しい時にないと、何となく気分がおちつきました。

○5年 涙を流す前は、何かが胸につかえて胸がいっぱいで、ただぼうっとするだけだ。流した後はすつきりする。

○5年 泣いた後はすつきりする。それは一回悲しくなると涙を流すが、その涙は悲しみの事だから、泣きが終わればもう涙は落ちた(悲しみは飛び去った)からすつきりする。

③-2 今泣いたカラスがもう笑った
○3年 顔をたたかれた。その時の気持ちのこつています。その時ふゆかいだったけれど、すつきりなきやむともうその子となかよく遊ぶ。

○5年 みんな泣いていた。庭で「泣いたら泣き虫だぞ」と言っていた男の子たちも、一生懸命涙をこらえていた。「なんでこんなに泣くんだろう」と思ってたくらいだった。教会を出ると、みんなとたんに元気になった。男の子は自分では泣いてたくせに、「みんな泣いてたろ。やーい泣き虫」とからかって、みんなににらまれた。

① 個性

①-1 とりつき

○2年 なき虫が、ぼくにとりつかないといいな。

○3年 大きくなってわたしはエーンとなきます。なきぼくろがあると言われたので、なくんだと思います。

①-2 匹夫の志

「取るに足らぬものの命も、自分にとって大切な意味がある、という意」

○4年 とても悲しかったので。大切な気持ちでも、ふつうの大切とはちがうのです。私の大事にしてきたきんぎょちゃん死んだのです。

①-3 対応した気持ちが不満足

○6年 その時はただ、お母さんが「こわい」とか「いたい」とかしか思っていないくて、「こめんなきい」って言えばゆるしてもらえと思っていた。「なんで私が悪いんだろう」と思うこともあった。

② 不如意

②-1 泣きたくても泣けない(哭と泣)

○3年 友達と遊ぶ時、私は一回泣きたい気持ちになりそうでした。とてもかなしい気持ちのようでした。めいっばいもないたり、なきたい気持ちがまだ心にのこっているようでした。

○4年 ちゅうしゃなにかの時、あまりなきません。なみだが出てきてく

れないのです。

②-2 泣きたくなくても泣いてしまう

○2年 がまんしたけど、ないてしまいました。

○3年 泣きたくないのに、なみだが出て、泣いてしまうのです。

○4年 私は、泣きたくないって思っているけど、ついなみだがつきからつきへとどんどん出てしまうのです。

悲しくなくても、なみだが出て、最後にはとっても悲しいです。

③ 自失

③-1 茫然自失

○6年 お父さんが(死んで)いなくなった時、あつげにとられて、泣くことも忘れていた。おぼさんの「いなくなったのよ、お父さんが」という一言で、わっと(テープの)あの声で泣き出したのです。

③-2 興奮(くるい)

○3年 いろんな人がなくと、どうしていいかわかりません。

○4年 その時の泣く声は、火が走っているようなたいへんな声でした。

○4年 泣いたとき、かみつきたいし、あいてのこをなかせたいし、あいてがなくまでないている。

○5年 すぐにむきになって、ぶつたり、けつたりするうちに、泣きながらどなったようになる。

○5年 泣いて泣きまくって私は顔が真っ赤。もうなみだがなくなるぐらい

泣いて、息がつまりそうになっている。

○6年 小さい時、母におこられた泣き方は、自分で泣いていて何をやっているのか、分からなくなるぐらいに泣きさけぶのです。そのうち、足をバタバタさせたりして、泣き声がさらに大きくなったものです。私もあんなに泣いたのかと、はずかしくなります。

③-3 血を見る

○3年 小さいころなきました。なぜかというところんでなきました。ちも出ました。その時になきます。血が止まったら、少しいたみも止まりました。わたしは、ほっとしました。

○3年 すごくいたので、私はないてしまいました。すごく血が出ていました。なみだが出てしまい、泣いてしまいました。

○3年 小さい時、私はちをみるたびに、「ウアーウアー」となきました。大泣きをしました。

○4年 石をなげられて、頭にあたったことがある。その時、頭から血が出た。その時、なきながら家に帰った。

○4年 足のつめがとれて、血が出たころもない。頭から血が出て、血だらけになってすごくないた。

○4年 いたくはないけど、頭から血が出て、びつくりしてないてしまうのです。

感情分類

A 体感

- 2年 きもちがくるしくなっていない。
- 2年 ほくがなくと、ほくのかおはあつくなつて、まっかになりました。
- 2年 あせもでて、もう大きわぎでした。
- 2年 心がしぼりつけられます。
- 3年 初めてようち園に行った時、お母さんの顔を見て、目になみだをためました。人の前で泣いたらおかしいと思つてなみだをこらえていました。がまんできなくて、息をはあつとはきました。そうしたら、なみだがぼつんとこぼれてしまいました。
- 4年 足をぬつたとき、わらつたよくな、ないたよくな声で泣いた。
- 4年 わたしがなくときは、大きな声で泣くのではなくて、最初は半ペソからしだいに声が大きくなっていくけれど、しくしくというより少し大きい声で、しゃっくりといっしょに泣いていた。
- 4年 泣くのが止まってしゃべつたりすると、息をすつたりはいたりするけれど、ふつうのはいたりすつたりするよりも大きくすつたりはいたりする。
- 4年 あまりじょうきょうをのみこめないほくは、ただいたいということだけを感じて、むがむちゅうで泣いた。

○5年 その時は、息が苦しくて、泣きながら思いっきり力を入れて、息をしても、まだ苦しいぐらいでした。

○6年 泣いた時は、あまりたくさん泣くと、しゃっくりみたいになつて、なかなか止まらなくなるのです。

B 反省

- 3年 三年生になつたら、だいたいこうかいして泣くようにしました。
- 3年 どうしても小さい時はないてしまいます。でももうあまりなかないようにしようと思います。
- 3年 今ほくが思うと、なんだ、それくらいでないてしまったのか、弱虫だなあと思いました。こんな自分はずかしくなりました。

C 処理

- 5年 いたくて泣くというのは、さびしくて泣くとか、困つて泣くというのより単純だから注射の時よりも、後のことだったかもしれない。
- 6年 いたいという事よりも、血が流れて気持ち悪いという事の方が大きかったのですが、お母さんをおぶの、いたいたいということで、大声で泣き叫びました。

D 対応

- 3年 何かにぶつかつて泣いたのなら、おこつてもしかたがありません。でも人間の場合、「今度あつたらやつつ

けてやる」という気持ちわいてきます。ほくはすぐ実行します。

○4年 ほくはその（けんかになつただろうから）かわりになみだをポロポロながし（少しだけ）、くやしさをかみしめました。

○6年 泣き声とは、泣く人は弱いと思ふけれど、自分の欠点をさがす第一の案だと思ひます。

I 感情整理

○3年 かなしくてなく、くやししくてなく、こうかいしてなく、の三つの型があります。三つのことをいっぺんに考えて泣くこともあります。

○3年 一番多いのはいたいときに泣きますが、ふしぎなことに、悲しいことやいたいとき、くやしときや苦しいとくに泣くのはなぜでしょう。それに大人は、うれしいときに泣くのはどうしてでしょう。

○4年 ないているとき、何をしているか、わからないときとときどきある。

○4年 いっしょけんめいがまんしたけど、やつぱり2分くらい泣いてしまった。その時（うでを折つたことより、いたくないんだから、こんなのはなんでもないや）と思つた。

○5年 泣いてもしょうがないのに泣いてしまうんですね。

○5年 つまり涙は、言葉や表現であらわせない役割を果たす、表現のかたまりだと思ふ。

○5年 例えば、赤ちゃんが涙を出して泣くときは、一番多いのが「気に入らない時」だと思ふ。それは赤ちゃんは何でも自分でやりたい事は、何でもやらなければ気に入らないのだ。次に子供の場合は、痛い時、憎い時が多いと思ふ。例えば、学校の上級生と喧嘩して、なぐられたりけられたりして、いたくて泣く。すると上級生は馬鹿にして行つてしまふ。すると憎い気持ちでいっぱいになる。

次に大人の場合は、嬉しい時が多いと思ふ。例えばうちの子が、こんなにまで成長していたとは、と言つてうれしなきをする。悲しい時としては、子供の時でも大人の時でもなる事だらう。

II 成長

○3年 小さいころは、とてもなきむしてした。でも今はぜんぜんなきません。おこられても言いかえずから、なかないと思ひます。

○3年 どうしてなみだが出るのかなあ、と思つた。小さい時、ふしぎだなあと思つた。

○3年 ちいちゃいころは、ぎやあぎやあないてたけど、今はちよろちよろです。

○3年 今はなく時間は、今のほうがない。

○3年 今はもうなきません。

○4年 気が弱いのか、少しのことで

涙がうかぶ、……3才までそんな感じだったか、年長になつたら、よほどのことでないと、涙はうかばなかつた。目に涙をうかべなくなつたら、どこでなくかと言つと、私は心の中でないていたような気がする。……ぐつと涙をこらえた。

○4年 小さいころは自分のことがよく分かつたけど、大きくなつたら小さいころの自分が、どうしてないたとかあまりわかりません。

○4年 ようちえんの時は、何も考えないでおもいきりなくけど、今はいろいろなことを考えてなく。

○5年 少し年が大きくなつてからの「泣き」は、いんきで声をあまり出さずに、人に見られないようなすみの方で泣くものだと思う。もつと大きくなつてからのことは、私はまだそんなに大きくなつていないのでよく分からない。とにかく、大きくなるにしたがつて、回数も少なく、複雑になるみたいだ。

○5年 真つ暗でこわかつたし、もう出してもらえないなんて思つて、泣いて泣いて出してもらおうと、泣く声にまじりながら「出して」ときけんだ。今思うとよくあんなに泣けたなと思う。その時は必死だったのだろう。今は、押し入れの中に入れられても泣かない。どうして泣かないのだろう。心が成長したからだろうか。もう、あの時みたいに泣けないのだろうか。

○6年 そうやつて泣いて、少しずつがまんすることによって自分が良くなつていくんだと思います。

○6年 いくら泣いている時にいやな気分でも、もう人をうらんんだり、おこつたりするのはやめようと思えるくらいになりたいです。

○6年 幼かつた頃の泣き方は、今のようすすり泣きではない。その頃は大きかつた。なぜなら助けを求めたりするために泣いた。今は人にたよらなくともやつていける。だからもう昔のように泣けないだろう。

○6年 はずかしながら、入学式で泣いたおかげで、今の自分ができたと思う。

○6年 今、くやしなみだのような良いなみだができたのは、小さい頃泣いて、一番大切な涙はどのようなものかを知つたからだ。

III 感情意味論

○4年 ぼくは、泣いたけど、何にもならなかつた。

○5年 人はどうして泣くのかな。なんか、泣くとき、むねがキュウツといたんで、涙があふれ出てくる。どうして泣くつていうことは、わかんないんじゃない？ 人によつてちがうし。

○5年 私たちが泣くのは意味があります。おこられた時には、反省の意味やくやしきです。それだし声で分かれます。きつと幼稚園の時、ごめん

さい、など意味をこめていたんではないかと思ひます。でも、早くでなさい、という時は、用事があつたの、という意味もあると思ひます。人には、いろいろな泣き方があるものだ。

IV 自己顯示

○6年 小さい頃の私は、ただ甘えたいばかりに、泣きじやくつていた。このくせは、今でも出ることがある。いつになつたら直るのやら。

V 泣いちゃいけない

○3年 よほうちゅうしゃで、おいしやさんは、じょうだんを言ひました。それをわたしは本気でなきました。今は、泣くのをむりやり止めました。

○4年 ないちゃいけないうんだ、と思ひました。でもなくということは、おじいちゃんにもうしわけないような気がして、ハンカチを目にあてました。

○5年 「泣いちゃいけない、ぜつたい泣かないぞ。」と思つても泣いてしまうことがあります。心の底で、ぐつとなみだがわいてきて、がまんできなくなつてしまうのです。泣く時は、たいていとても悲しい気持ちか、うれしすぎる気持ちで泣きます。「決して泣いちゃいけない」と思つて泣いてしまう時は、とてもはずかしくなると思ひます。

(意) 感情分類の総合

○5年 ぼくは、小学2年ごろ、ない

ても意味がないとわかつた。それからだ。くやしいとときかなみだをながさなくなつたのは。

○5年 もし、1年生や年下の人が泣いていたら、私達はどうしたらよいでしょうか。それは、ほうつてはおけません。必ずめんどうをみます。それは泣いている子がかわいそうだから、ということもありますが、もつと多いのは、その子に対する自分の気持ちからだと思います。

4 考察

一見して明らかのように、「泣くこと」は、これだけの広がりを持つていることが分かる。泣きの働きの広がりであるから、いわば「地図」である。

従つて、今泣いている子どもが、この地図のどこで泣いているか、を一応見ることが出来る。また、「地図」であるから、学年発達を表しているわけではない。図では、整理する都合上番号を振つてゐるが、特に意味のあるものではない。図の構成で意味のあるものは、それぞれの線がどことつながつてゐるか、また、どこから分かれてゐるか、更に他のものとどれほど離れてゐるか、である。

今回の研究での最大の成果は、泣きを「形態」「情意」「感情分類」の三つ

に分類整理できたことである。そして、それがそれぞれ、「知」「情」「意」の人間の文化価値に符合することを発見できたことである。

以上のことをもう少し実際に即して解説してみたい。

子どもが泣く時、泣く姿や形ばかりを意識して泣く面が「形態」である。泣く時に自分の気持ちや感情を、どうしようか、と意識して泣く面が「情意」である。またその感情を自分の内でもう対応したり意味付けしたりするのを意識する面が「感情分類」である。

その「形態」「情意」「感情分類」が知情意の文化価値と符合するというのは、次のようである。

「知」としたのは、人間には知的な精神活動があるために、泣きの働きを形態的に捉えようとする事によってである。

「情」としたのは、泣きの働きを、情的に捉えようとする心の働きを、人間が察知している事によってである。

「意」としたのは、形態的に捉えられたものと情意として捉えられたものとを、どのように意志的に対応させようとしているか、という働きがあるためである。

更に言えば、泣きの働きでは、「知」の面が働くから泣きの姿・形を捉えることができるのであり、「情」の面が働くから泣きを感じそのものとして意識することができるのである。また、「意」

の面が働くから泣きの形態や感情を自分で整理したり処理したりすることができるのである。

さて、「感情分類」には、「体感」と「感情整理」の二方向がある。

ここでいう「体感」とは、泣きの形態や情意を体で表したり、感じたりする働きである。それが図にあるように「共時的」であるというのは、「体感」は常に、形態や情意と共に時間の流れのない中で現れるからである。それに対して「感情整理」が「通時的」であるというのは、「感情整理」(泣きの感情を整理しようとする働き)は常に形態や情意を時間の流れの中で処理していくこととする働きがあるためである。

言い替えると、「共時的」であることは、時間の流れと泣きに於ける自分の意識の流れとが一緒になってしまいうたため、現時点的に泣きを捉えようとするのである。従って、いつも現象的に自分の泣きの体感をつかまえようとするのである。それに対して、「通時的」であることは、時間の流れを通して自分の泣きを捉えようとするのである。言わば歴史的な捉え方のできる評論家タイプということが出来る。

しかし、「意」には「体感」と「感情整理」の二方向があると共に、感情を分類整理したものを「総合」しようとする働きもあることが認められる。つまり泣きの感情を分析すると同時に総合的に捉えようとする働きである。

さて、「通時的」とは、自分を歴史の流れの中で捉えようとするものであると言ったが、それは自分の「成長」をそのように意識しているということでもある。そこで子どもは、泣きに於て自分の成長をどのように捉えているのかを考えてみたい。

(3年生の作文)

自分が泣いた時、または泣いたらをしてよくおこられました。一、二年の時、よくおこられました。「してはいけないよ」と言われてはしてしまし、ぼくはおし入れに入れられたこともよくありました。

「今日はおこられないぞ、いたずらをしても平気だ」と小さいころはよく思いました。でも今はそんなことは考えないようにしました。

泣くというのは、自分が悪いから泣くのです。いたずらをして、お母さんにおこられて泣くというのは、かなしくて泣くのと、くやしくて泣くのと、こうかいして泣くのと、三つあります。ときには三つのことをいっぺんに考えて、いっぺんに泣くこともありました。その時は本当にくやしかったので泣いたものでした。本当に泣くって、私はくやしいうたいくやしいうたい泣くようになります。三年になったら、だいたいこうかいして泣くようになります。でもおねえちゃんとかケンカして泣く時は、くやしくて泣きます。

その時によって三つの泣きかたがかわると思います。

この作文は、「通時的」に自分の泣きを捉えた例と言えよう。やはり、この子も自分の泣きを評論しているのである。このような作文が書けたのは、4才児の泣きの音声を聞き付けた時に、自分の現在時点での泣きと、自分の幼い頃の泣きとを比較し、自分も成長したんだ、という意識があったためであろう。従って、自分の感情の軌跡を振り返り返れば、自分の成長ぶりを感ずることができる、というのが人間である、と言える。また、人間は、自分の感情経験をずっと引きずって生きていく、と言える。子どもの泣きの作文の中に、「成長」を感じ取ることができるのは、それ故であろう。

泣きの感情整理の意味に於いて「成長」を以上のように捉えることが出来るが、人間の成長そのものを考えようとする時には、それだけでは不十分である。つまり何をもって「成長」というのか、と言うことである。その概念の定義の仕方が問題となる。泣きの精神構造図は、前にも述べたように、「地図」であって、成長発達図ではない。確かに、この作文に見るように、「孤立」や「強情」、「小形態」(形態の中の小さなもの)などは、幼い頃から発達する形態である。従って、構造図の上の方が幼い頃の発達、下に行くほど大人に

近くなり、精神の働きも複雑になる、と見れないこともない。しかし、「孤立」のまま成長することもありうるし、

形態の広がりや発達に会得してしまふ、年齢が少なくないうちに会得してしまふ、ということもありうる。それらをも「成長」とするならば、構造図の中の各要素が個々の人間に於いてどう発達するのか、を見ていかねばなるまい。これは今後の研究に残された課題である。それを解く一つの鍵となるのが、

「形態」と「情意」の中間に位置する「個性」「不如意」「自失」であろう。

個人の人間に於いて、例えば泣きの仕組み一つを取り上げて、構造図に見るように、これだけの精神構造の広がりを持っているのであるから、それをどの人間も同じように成長発達していると思えることはできない。そこに

「個性」を見ることが出来る。

論語の中に、「子曰ク、三軍モ帥ヲ奪ウハ可ナリ、匹夫モ志ヲ奪ウハ不可ナリ」とある。つまり、軍隊を率いる力を持っている大将でも、取るに足らない、つまらない者たちの、人間の最も最低の基本的な志、つまり「匹夫の志」すら曲げることができない、ということである。そんなつまらないことについてまでもこだわらないで、その考えを捨ててしまいなさい、と言つても、どうしても捨て切れないものを持つていて、という子どもがいる。そのように、どうしても捨て切れない個々の癖や持

ち味を「個性」と言つてもいいであらう。

そういった「個性」が現れてくることによって、「不如意」つまり、「泣きたくても泣けない」「泣きたくなくても泣いてしまふ」ように、自分が泣こうと意識しなくても泣いてしまふことになる。それは「個性」があるため、何かにかみつき、こだわるものがあるから、自分が泣こうと意識しなくても泣いてしまふのである。

この「不如意」が、もつとせつぱ詰まった状態にあるのが、自分を失った状態「自失」である。もう何が何だか訳が分からない状態である。それは、言い替えれば、「個性」によって、つまり自分のこだわりによって、訳が分かるようにしようとするから、訳が分からなくなる状態であるとも言える。

こういった、我を忘れて泣く状態は、「形態」や「情意」を越えた状態、言わば最も人間の本性や本音が現れた状態である。まとめてみると、「形態」と「情意」の間でその人なりの泣きの特性、つまり「個性」が現れたり、泣きたくなくても泣いてしまふというようにな「不如意」の気持ちに捕らわれたり、我を忘れるというようにな「自失」の状態になつたりするのである。

考えるみると、我々が人を見ようとする時、どういう時に泣くか、どのように泣くか、ということによって、その人らしき、つまり「個性」を見てい

るのである。それは、「泣き」が人間の本性に根差しているからであるといえよう。

次のような子どもの泣きの報告がある。

めつたに泣かない子が泣いた。それを周りが慰めるが、「ほつといてくれ」と言つたそうである。つまり、自分一人にして泣かせてほしい、と言っているのである。そしてこの子は、夜一人になつた時に泣いたそうである。それは、「滅多に泣かない」という「規制」の中で、格好を付けてそのような「ポーズ」を取つたということだけではなからう。「個性」的なこだわりの中に於いて、「形態」や「情意」を包み込んだかたちで泣いているはずである。そこには何か、人間としての基本的な作用が働いているに違いない。

我々はそれを「浄化」として捉えている。「浄化」は、自分の魂の鎮静化である。前の例で言えば、夜一人で泣くことが、自分の本性に立ち戻る「浄化」なのである。子どもが長泣きしている場合でも同じである。長泣きしながら、そのうちに耳を澄ませかかってくる。

そして周りの人達の対応の仕方、その変化の仕方を見ようとする。また、気持ちや鎮まつてくると共に、自分の感情の変化や爆発をも期待している。それも一つの「浄化」の姿である。しかし、長泣きする時間が長すぎると、時間経過に伴つて、泣いた動機や目的意

識が変化していき、なぜ泣いたのか分からなくなってくる。従つて、泣きが止まらずに、自分の感情を元の鞘に戻すのに苦労している子どもには、大人が手助けしてやらなければならないのである。

今まで我々は泣きの実態を捉えることによって、人間の本性にまで思い至ることができた。つまり、泣きは、単に行動の現象ではなく、人間の成長に伴つて動いていく、人間成長の発達の証である、ということである。そして、泣きの本質は、人間の精神の「浄化」作用であることも明らかにすることができた。

ところで、子どものうちは、「形態」や「情意」や「感情分類」のある部分で泣いていることが多い。また、そのことを自覚できないことによって、苦しい感情生活を送つていられるとも言えるだろう。従つて、今日の前で泣いている子どもが、「形態」や「情意」や「感情分類」のどこで泣いているのか、ポーズで泣いているのか、不安で泣いているのか、その子なりに「個性」が現れた姿で泣いているのか、泣いたことによつて魂が「浄化」されているのか、また、泣いたことによつて、自分の成長を感じ取つたりしているか、などを親や教師が把握し、子どもをより良い感情生活に向かわせることが、真の教育の姿であらうと思ふのである。

(東京・玉川学園小学部教諭)